

まちは大きな博物館

「プチミュージアムの郷プロジェクト」と「奥能登トリビア蔵」を考える

【趣旨】

「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」は民家の土蔵や地域に眠る伝統文化を掘り起こし地域振興に活かす活動を続けている。店舗や民家の一角に、それを体感する「奥能登トリビア蔵」を構築し、域外の人々はこれによりこの地を「歴史文化の隠れ里」と称し、住民たちはこの地を先人の血と汗の結晶と捉え地域愛を増幅する。この、町全体を大きな博物館とする「プチミュージアムの郷プロジェクト」について考え、その手法のモデル性と効果、及び問題点を検証する。

【ゲスト】

瀬戸 達

NPO法人歴町センター大聖寺 事務局長

石川県加賀市生まれ。瀬戸設計主宰、一級建築士。2004年以来、毎年西村幸夫町並み塾を開催。極めて行動的な性格である反面、「楽しく、無理せず、こころと形に残るように」をモットーにまちづくりを推し進めている。

大橋 のり子

元・石川テレビ放送アナウンサー

報道番組・情報番組・朗読番組を担当。石川テレビアナウンサーによる朗読番組「金沢三文豪の世界」で泉鏡花、徳田秋声、室生犀星の作品を朗読し好評を得る。現在は司会、講師などフリーで活動中。

【コーディネーター】

埴 正浩 株式会社日本海コンサルタント専務取締役

石川県能登町生まれ。東洋大学工学部卒業。金沢大学大学院博士課程終了。現在、金沢大学非常勤講師、金沢工業大学非常勤講師、NPO法人歴町センター大聖寺理事。

協力団体 ● 民有「歴史文化」資産の保存活用を考える会

会場 ● 能登町宿泊体験交流施設 ラプロ恋路

参加者 ● 38名

1. 分科会要約

第2分科会では、「民有歴史文化資産の保存活用を考える会」が能登町で取り組む、地域の伝統文化を掘り起こし地域振興に活かす活動についてディスカッションした。

ディスカッションを始める前に、「奥能登トリビア蔵」「恋路海岸」をバスで移動して実際に見学しながら各施設の概要、特徴の説明があった。ここで実際に自分の目で見て、現物にふれることにより、参加者の当事例に対するイメージが深まった。そのあと、プチミュージアムの郷プロジェクトの概要説明があった。当プロジェクトでは、地域イメージとして地元の歴史文化を活かし、「奥能登トリビア蔵」というミニ博物館のパッケージをサービスとして提供して、「歴史文化の隠れ里」という地域ブランドを構築し、観光客の集客につなげる活動を行っている。平成18年よりスタートし、各種助成制度を活用しながら、トリビア館13館、サイバー館が40館にまで広がってきた。そして、大橋のり子さんのよる「恋路伝説」の朗読があり、恋路海岸の由来について参加者に伝えられた。

このような説明があり、参加者の当プロジェクトについての理解が深まったところで、ゲストを交えた意見交換会が行われ、まず、瀬戸氏より自身の取り組む大聖寺まちづくりの取り組みの紹介があった。そのなかで、①おもてなしの気持ちがないといけない②幅広い年齢層の人たちと一緒に取り組むことが大事であり、特に子供や女性を

巻き込んでやる③全国大会などを行い著名な人をも巻き込んでいく④まちづくりの成功事例のトップの方と交流をもち、生の情報を聞く⑤官に頼らず、民でやれることはすべて民でやる⑥無理をせず、やれることをやれる所からやれる様にやる⑦たのしくやるといった話があった。

つぎに大橋氏より、地域にくらす人とのふれあいから見えるものとして、自身の取材活動をふまえた事例紹介があった。①まちづくりで成功しているところには必ず熱い思いをもった牽引者がいる②熱い思いは観光客にも伝わる③観光客は地域に暮らす人たちとのふれあいをもとめている④観光客はこんな人見つけた、こんなもの見つけたといった具合に自分で歩いて見つけたときに感動するので、そう思わせる仕掛けづくりも大事といった話があった。



2. 開催で得たもの（新しい発見）

地域づくりに必要なものは何かということについてのディスカッションであったともいえ、つぎのようなことが地域づくりには必要だと参加者の間で共有された。熱い思いをもってあらゆる

る困難に立ち向かう。考えるだけでなく、行動する。おもてなしの気持ちをもつ。

3. 分科会まとめ

埒氏より分科会のまとめとして次のような話があった。

能登の人は引っ込み思案で、自分の意見をはっきり言わない。しかし、まちづくりに必要なことは、行動すること。汗もかいて、知恵を出して、金も出す。一歩前へ進むまちづくり。これに尽きる。そして、楽しんで取り組む。そこにいるその人がやってることが、おもしろそうだから地域が魅力的になる。

また、まちづくりにはネットワークが必要となるが、紙の上の線のつながりじゃダメで、その人の心とその人の心がつながり、そして裏切らないといったつながりが必要となる。そして、取り組む順番は金先じゃない。何をやりたいかから入る。行政についてはあくまで黒子であるべき。いつまでも行政が中心にやってるまちづくりは、おカネがなくなったらそのまちづくりもなくなる。民が中心にならないと継続していかない。

最後に、たのしくやること。そのためには、仲間をふやすこと。増やすべき仲間はどのような人なのか考えること。

4. 今後に向けた展開

瀬戸氏からは、今のままでは成功しない。おもてなしの心ももっともたな

いといけないし、もっと若い人や女性の声も聞き、それに本音で応えていけないといけない。他の地域の失敗事例も参考にしてこれから取り組んでいていただきたいとの激励があった。

大橋氏からは、観光客はふるさと感じたいと思っている。自分のふるさとじゃなくても、人とのふれあいを期待しているので、そんなふれあいがもてるようなまちづくりを楽しんでやっていってくださいとの話があった。



4. 参加者の声

瀬戸先生の話は、当たり前のことを当たり前にするという話であった。人の話を聞く素直な姿勢も必要だと感じた。今日の話はすべて実体験からきた話であったので、大変参考になった。